

長府藩毛利家屋敷地の事例に見る 江戸城下町の形成と土地改変

菊 地 真

- I. はじめに
- II. 江戸城下町の土地改変
- III. 江戸城下町形成にともなう土地改変
 - (1) 天下普請の概要
 - (2) 長府藩毛利家屋敷における土地改変
 - (3) 毛利家の事例と江戸城・城下町の整備
- IV. まとめ

I. はじめに

東京は徳川家康の居城、江戸城を中心に、城下町の発達した地である¹⁾。江戸城は元来太田道灌によって康正2年(1456)に築城されたものであるが、家康の入城後、城下町の形成は城郭の整備を主として徐々に進められ、大坂の陣の後に城下町全体の整備が行われた。その後、明暦の大火による被災と復興によって城下町は再編成と郭外への拡大を加速させ、幕末に到るまで、スプロール現象を起こしつつ、その範囲を広げていった。またそのような土地利用変化をもたらした江戸時代の開発は、少なからず大規模な土地改変をともなっており、そのことは文献史料のほか、考古学資料からも知られているところである²⁾。

なかでも寛永年間までの江戸城を主とした開発は、江戸の城下町の基本整備が行われた

点からも注意される。江戸城は時期を追って次第に整備・拡充され、外堀の普請をもって城郭整備は一段落する³⁾。また城郭の内外に配置された大名ほかの武家屋敷、寺社や町屋についても、あわせて整備がすすめられており、それらの建設の際にも頻繁に造成が行われた。筆者が加わった長府藩毛利家の屋敷跡の調査でも、具体的な土地改変の痕跡が検出されている⁴⁾。

江戸城下町の構造について、その歴史地理学的研究は数多く知られている⁵⁾。しかし城下町の全体的な拡張過程等が明らかな反面で、具体的な開発と土地改変の様子についての個別の検討事例は、北原(1999)や後藤(2001)など近年いくつか知られるが、まだその数は少ない⁶⁾。江戸城下町における個別の屋敷地あるいは町単位での土地改変について、詳細に検討することは、江戸城下町全体の開発の復原とその評価にもつながることであり、具体的な事例の蓄積は重要な課題と考えられる。

そのため本研究では、寛永17年(1640)に成立した長府藩毛利家屋敷跡の事例を取り上げ、城下における大名屋敷周辺の土地改変について復原し、江戸城下町の寛永年間までの整備にともなう土地改変の一側面を明らかにする。

キーワード：江戸城下町，城下町整備，土地改変，長府藩毛利家

江戸城下町は、時期を追うごとに土地利用が大きく変化し、その範囲も拡大をしている。その画期については、おおよそ徳川家康入国から江戸城郭の完成まで、明暦大火後の復興と、吉宗以降の3つに分けられ、なかでもその最初の時期は、入国直後の整備と、関ヶ原の戦い後の慶長・元和・寛永期の天下普請の4つに細分されている⁷⁾。

本研究では、江戸城郭の完成するまでの時期を中心として、城下町発達の画期を、(I)天正18年の家康の江戸入城から元和・寛永の天下普請の完了まで(1590~1656)、(II)明暦3年の大火から幕末まで(1657~1867)の2時期に大きく区分する⁸⁾。ここで扱うのは、城郭整備が本格的に行われたI期、なかでも長府藩毛利家屋敷跡の成立する元和・寛永の天下普請の時期(1615~1656)とする。以下、特に断らない限り、城下町の範囲もI期までの範囲を基本とする(図1)⁹⁾。

II. 江戸城下町の土地改変

本節ではI期・II期を通じた江戸城下町全体の土地改変の推移を概観し、元和・寛永の天下普請の時期を中心とした、江戸城下町の開発のあり方を整理する。

江戸では家康の入城後、各所で城下町の建設が進められた(図1,表1)。この城下町建設にともなう土地改変の痕跡は、近年の発掘調査で多く確認されている。ここでは武家屋敷の他、敷地全体に盛土等が及ぶ数百㎡以上の造成が行われた計67ヶ所の遺跡を取り上げ、集成した(表2)¹⁰⁾。

その分布を総じて見ると、江戸城内郭・外郭に位置する武家屋敷の改変が結果的に多く表れている(図2)。考古学的にはI期の文禄3年までの事例はほとんど知られておらず、和田倉遺跡の調査から、江戸城西の丸の造成にともない現在の皇居外苑まで盛土されたことが推定されている¹¹⁾。また慶長年間も同様に事例が少ない(1,

2。番号は図表と対応、以下同じ)。もっとも、史料における神田山崩しと日比谷入江の埋め立てが示すように、城下町の基礎を形成する大規模な土地改変が実施されており、今後、史料も踏まえ再検討する必要がある。

I期のうち元和・寛永期については、外堀普請(7~9)にともなう造成が紀尾井町(10)や四谷一丁目(11)、四谷御門外町屋(12)などで確認されているほか、長府藩毛利家(15)と同様な屋敷

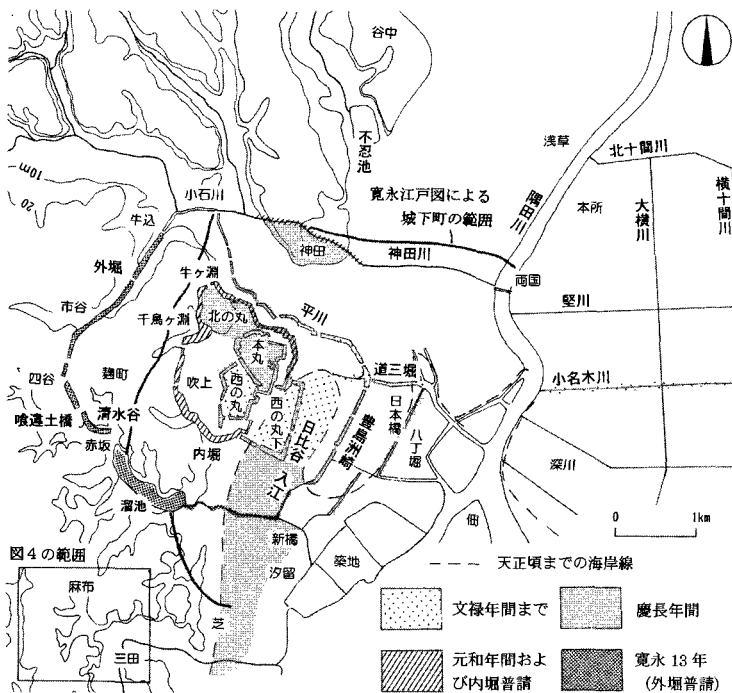


図1 江戸城の主な整備の推移

鈴木理生(1976)による。地形は二万分一地形図(明治44年)に基づく。

表1 江戸城下のI期の主な造成工事の推移

年号	主な事項
天正18年 1590	徳川家康、関東に移封。江戸城入城 江戸城本丸改修。平川の付け替え。道三堀、小名木川開削（河川の造成は天正19年まで） 局沢・吹上などの寺社、城外（馬喰町・神田・浅草・谷中・麴町・牛込）移転。 以後、西の丸造成や外堀普請にともない移転進行（慶長～寛永年間）
文禄元年 1592	江戸城西の丸造成、堀浚い。日比谷入江の埋立（現・皇居外苑～日比谷までか）。千鳥ヶ淵、 牛ヶ淵堰き止め
文禄3年 1594	家康、京都伏見城の普請を豊臣秀吉より賦課さる（江戸の普請中断）
慶長5年 1600	関ヶ原の戦い
慶長8年 1603	家康、征夷大將軍。江戸幕府開府 江戸城の建設本格化（天下普請） 神田山（現・駿河台）崩し、日比谷入江を埋め立て。豊島洲崎を造成（現・日本橋浜町～新橋）。 隅田川左岸（本所・深川元町）埋立
慶長11年 1606	江戸城本丸・二の丸・三の丸の石垣造成
慶長12年 1607	江戸城天守の造成
慶長16年 1611	江戸城西の丸の石垣造成
慶長17年 1612	日本橋舟入堀の造成
慶長19年 1614	江戸城本丸・二の丸の石垣造成。西の丸下（現・皇居外苑）の堀開削。旧石神井川（現・谷田川）の 不忍池より下流を隅田川に付け替え 大坂の陣（普請中断）
元和元年 1615	大坂の陣終結 神田～新橋の町屋成立（元和2年まで）
元和2年 1616	家康死去 神田川（御茶ノ水の堀割）開削。駿河家臣団の江戸移住（駿河台）
元和4年 1618	江戸城建設再開
元和6年 1620	江戸城本丸・北の丸・西の丸周囲（内桜田～清水門）の石垣、城門の枳形を造成
寛永2年 1625	上野寛永寺建設、子院群は寛永年中（～1643）に成立
寛永6年 1629	江戸城内郭（西の丸下・丸の内・八重洲）の石垣・城門の枳形造成、内堀の堀浚い（内堀普請）。 深川狹師町・永代島の埋立
寛永13年 1636	江戸城外郭の堀（四谷門～喰達土橋間）開削、堀の石垣・城門の枳形造成、外堀の堀浚い（外堀普請）。 内郭および城門周辺の寺社、町屋が移転される。寺社は八丁堀、麴町、赤坂から芝・浅草、牛込、 四谷へ再度移転。町屋も市谷、四谷などへ。汐留埋め立て（保科家・伊達家）この頃か
寛永17年 1640	毛利家（長門府中藩）、上屋敷を拝領。麻布周辺の整備この頃までか
正保元年 1644	佃島埋立

千代田区政五〇年史編纂委員会編（1999）による

地として、湾岸の汐留（4, 13）、尾張藩麴町邸（14）があげられる。地図上では郭外に数例が認められる他は外堀周辺に事例が偏っており、開発の集中する地域を示唆する。土地改変は高さ1～4m程のものが多く、事例数からなお不確実な面はあるが、慶長年間から寛永年間にかけて主だった大名が屋敷を相次いで拝領したことが知られており¹²⁾、大名屋敷建設にともない、大規模な切土・盛土を行い敷地を整地する類の開発が、I期に屋敷単位で進行したことが推測される。

II期は江戸城下町のほとんどが焼失した明暦大火後の復興から始まる。この復興整備については、すでに大火以前から、内郭一帯に

集中していた屋敷配置を再編する動きが幕府にあったことが指摘されており¹³⁾、大火にともなう城下町の復興は、一面で町割りの再編を促進した。大きくは、御三家の屋敷が内郭から移転し、他の武家屋敷や寺社も郭外等へ移転され、火除地として明地、広小路が設けられた。また新たな干拓・埋め立てが、郭内の築地、牛込、小石川、溜池や、隅田川を越えた本所、深川で行われ、それらの埋立地の多くが武家屋敷となった（30,36,38）¹⁴⁾。II期の明暦大火に関する土地改変は、I期までの城下町域内における火災後の改築（19～28）と、郭外での新規造成（29～42）に二分される。事例はI期と比べて倍増しており、城下

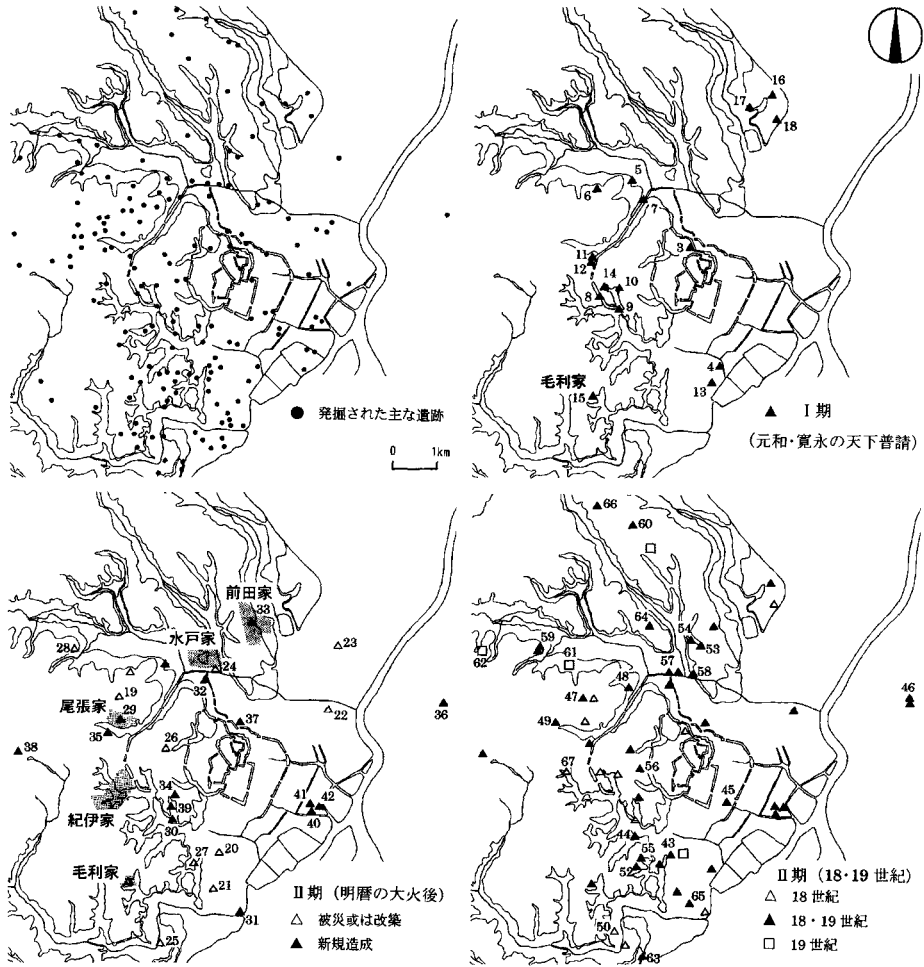


図2 発掘調査地点にみる土地改変の推移
遺跡のデータは各報告書による。番号は表2と対応。

町の全域に分散し、外堀周辺など特定の地域に集中することがない。これは城下町全体が被災したという大火の性格をよく反映している。ただし武家屋敷の事例が多く、地図上の分布は外堀周辺にややまとまっている。

造成された面積や盛土等の高さを比較してみると、改築か新規かを問わず逆に減少傾向にある。長府藩毛利家も天明大火で被災しているが、再建時の整地は最大でも40cm厚で、拝領当時より格段に規模が小さい¹⁵⁾。これは改築の場合、大幅な整地を要しなかったことに加え、寛永年間までに大規模な開発用地が

少なくなっていたことを表しているとも受け取れよう。

その後、幕末期までの土地改変は年代的なまとまりがない。図表では18・19世紀でおおまかに分けてみたが、現状では傾向の抽出は難しい¹⁶⁾。18世紀以降に現れる遺跡(43~67)は郭外が全体に多く、19世紀には城下町外縁の例が微増する。全体として18・19世紀の実態はI期にも増して不明の点が多いと言えよう。

表2 近世江戸城下町の土地改変

番号	遺跡名	種別	調査面積 (㎡)	地形	I期・II期(17世紀):改変の事由・規模(面積(㎡)/高さ(m)/土量(㎡))		盛土(埋立含む)						
					盛土	埋立	切	土					
(慶長)	1 駿河台	武家	1,000	台地	造営	(神田山崩し)			1,000	7.0	7,000		
	2 麹町六丁目	武家(D)	5,200	台地	造営		3,400	0.3	1,020				
	3 竹橋門	江戸城	600	低地	造営		600	4.0	1,560				
	4 汐留(脇坂家)	武家(D)	31,500	埋立地	造営		19,500	0.5	9,750				
	5 矢来町	武家	350	台地	造営		350	1.0	350				
	6 筑土八幡町	武家	1,200	台地	造営		1,200	0.6	720	1,200	0.6	720	
	7 牛込御門外橋詰(外堀)	江戸城	60	低地	造営		60	9.0	540				
	8 赤坂御門(外堀)	江戸城	1,230	低地	造営		200	2.0	400	600	3.0	1,800	
	9 喰違土橋(外堀)	江戸城	400	低地	造営		400	3.0	1,200	400	6.0	2,400	
	10 紀尾井町	武家(D)	6,800	台地	造営		2,500	5.0	12,500				
	11 四谷一丁目	武家	260	台地	造営		260	0.8	208				
		町屋	330	台地	造営		150	1.0	150				
		町屋	500	台地	造営		500	3.6	1,800				
	12 四谷御門外町屋	武家(D)	195,000	埋立地	造営		195,000	2.5	487,500				
	13 汐留(保科家・伊達家)	武家(D)	195,000	埋立地	改築		195,000	0.5	97,500				
	14 尾張藩麹町邸	武家(D)	5,200	台地	造営		3,400	0.4	1,360				
	15 長府藩毛利家	武家(D)	820	台地	造営		750	3.0	2,250	50	10.0	500	
	16 上野東文研	寺社	2,800	台地	改築		2,800	0.3	840				
17 寛永寺護国院	寺社	1,700	台地	造営		1,700	1.5	2,550					
18 上野国立科学博	寺社	2,700	台地	造営		1,100	0.4	440					
I期	小計a)		257,650			233,870		622,638	3,250		12,420		
(天明)	19 市谷加賀町二丁目	武家(D)	1,200	台地	火災		1,200	0.1	120				
	20 港区No.19	武家	870	低地	火災		870	0.8	696				
	21 増上寺子院群	寺社	1,450	低地	火災		1,450	0.5	725				
	22 都立一橋高校	寺社	2,400	低地	火災		2,400	0.2	480				
		長府藩毛利家	武家(D)	820	台地	火災		750	0.4	300			
	23 白陽	武家(D)	1,250	低地	改築					1,250	0.5	625	
	24 春日町	武家(D)	860	台地	改築		300	0.3	90				
	25 田中家屋敷	武家	3,700	低地	改築		3,700	0.2	740				
	26 一番町	武家	3,000	台地	改築		3,000	0.2	600				
		筑土八幡町	武家	1,200	台地	改築		1,200	0.5	600	1,200	0.5	600
	27 天徳寺寺域第3	寺社	1,600	低地	改築		1,600	0.1	160				
	28 六八幡神社	寺社	1,800	台地	改築		1,800	2.0	3,600				
	29 尾張藩上屋敷	武家	283,000	台地	造営					3,000	0.6	1,800	
		武家(D)											
	30 溜池	武家(D)	3,400	低地	造営		3,200	0.5	1,600				
	31 旧芝離宮庭園	武家(D)	1,000	埋立地	造営		700	1.0	700				
	32 飯田町	武家(D)	4,100	低地	造営		4,100	0.6	2,460				
	33 東大橋内	武家(D)	13,670	台地	造営		4,000	1.3	5,200				
		(前田家上屋敷)			改築		(天和2年火災。土取土坑)						
	34 和泉伯太藩上屋敷	武家(D)	750	低地	造営		750	1.1	825				
	35 三栄町	武家	3,000	台地	造営					1,000	5.0	5,000	
	36 江東橋二丁目	武家	1,200	低地	造営		1,200	0.4	480	150	1.0	150	
	37 一ツ橋二丁目	武家	3,400	低地	造営		3,400	0.3	1,020	3,000	2.0	6,000	
	38 千駄ヶ谷五丁目	武家	23,200	台地	造営		4,000	0.4	1,600				
	39 溜池(山王社)	寺社	1,500	低地	造営		1,500	0.4	600				
	40 京葉線八丁堀	寺社	200	低地	造営		200	0.6	120				
	41 八丁堀三丁目	寺社	260	低地	造営		260	1.0	260				
		武家			造営		260	0.4	104				
	42 八丁堀二丁目	寺社	580	低地	造営		580	0.5	290				
	武家			造営		580	0.5	290					
	小計b(明暦大火)		359,410			42,160		23,660	9,600		14,175		
大火	43 伊勢孤野藩土方家	武家(D)	5,700	低地									
	44 筑前福岡藩黒田家	武家(D)	240	低地									
	45 丸の内三丁目	武家(D)	11,350	低地									
	46 錦糸町駅北口	武家(D)	2,100	低地									
	47 市谷加賀町一丁目	武家	500	台地									
	48 若宮町	武家	1,000	台地									
	49 住吉町南	武家	1,300	低地									
	50 港区No.91	武家	510	低地									
	51 白金館址	武家	2,800	台地									
	52 陸奥八戸藩南部家	武家(D)	7,900	台地									
	53 本郷元町	武家(D)	6,100	台地									
	54 真砂	武家(D)	2,000	台地									
	55 麻布市兵部町地区	武家	500	台地									
	56 隼町	武家	3,000	台地									
	57 本富士町	武家	1,800	台地									
	58 駕籠町	武家	7,000	台地									
	59 新諏訪町	武家	1,600	低地									
	60 巣鴨	武家	950	台地									
	61 早稲田南町	武家	700	台地									
	62 百人町三丁目西	武家	12,600	台地									
	63 芝田町四丁目	町屋	2,800	低地									
64 日影町	町屋	1,600	台地										
65 芝神谷町	町屋	2,500	低地										
66 染井	町屋	1,000	台地										
67 圓應寺跡	寺社	230	低地										
	小計c(18世紀)		663,870										
	小計d(19世紀)		372,160										
	小計e)		682,290										
II期	総計)		694,840										

[注] 1) 遺跡名は報告書名のままとし、一部武家名等を注記。武家(D)は大名家等の意。改変は造成・改築・火災に分けた。改変事由・時期の明らかなものは表中に注記。報告書典拠の教
 委は教育委員会、都立学校は都立学校遺跡調査会、地下鉄七号線は地下鉄七号線遺跡調査会、都埋文は東京都埋文文化センターの略。

Ⅱ期(18世紀):改変の事由・規模(面積(m ²)/高さ(m)/土量(m ³))			Ⅱ期(19世紀):改変の事由・規模(面積(m ²)/高さ(m)/土量(m ³))			報告書(発行者・年)				
盛土(埋立含む)			切土							
改築	600	0.2	120			明治大学考古博1998				
改築	12,000	1.5	18,000			同遺跡調査団1995				
				改築	31,500	0.3	9,450			東京国立近代美術館1991
(外堀普請)										都埋文1997
(外堀普請)										新宿区教委1994
(外堀普請)										新宿区教委1996
改築	900	2.0	1,800							地下鉄七号線1994
										地下鉄七号線1995
										地下鉄七号線1995
										同遺跡調査会1988
										新宿区教委1998
改築	500	0.8	400							地下鉄七号線1996
改築	195,000	0.3	58,500	(享保年間火災)						汐留地区遺跡調査会1996
改築	112,000	0.2	22,400	(保科家寛政6年火災)						都埋文1997
改築	3,400	0.4	1,360							千代田区教委1994,1997
										港区教委2002
改築	2,800	0.4	1,120							東京文化財研究所1997
火災	2,700	0.6	1,620							都立学校1990
										同遺跡調査団1995
火災	1,200	0.2	240							新宿区教委1997
火災	1,450	0.4	580							港区教委1989
火災	2,400	1.4	3,360	(武家屋敷→町屋へ転換)						港区教委1988
火災	750	0.3	225	(享保年間に被災か)						同遺跡調査団1985
										港区教委2002
改築	560	0.9	504							都立学校1990
改築	3,700	0.3	1,110							文京区教委1991,1996
改築	3,000	0.1	300							港区遺跡調査事務局1998
										千代田区教委1994
改築	1,600	0.1	160							新宿区教委1996
改築	1,800	2.0	3,600							同遺跡調査団1992
火災	3,000	0.2	600	(享保10年火災→火除地)						新宿区教委1993
造営	283,000	0.8	226,400	(明和4年尾張藩拝領)						新宿区教委1993,1995
造営	3,200	0.7	2,240							都埋文1996~1998
改築	1,000	1.0	650							都内遺跡調査会1996
改築	4,100	0.1	410							同遺跡調査団1988
造営	3,400	5.0	17,000							新宿区教委1995
改築	3,200	0.2	640							東京大学埋蔵文化財調査室
火災	750	0.1	75							1989・90,1999(年報)
										地下鉄七号線1994
改築	1,200	0.5	600							新宿区教委1988
火災	3,400	0.4	1,360	(享保2年火災)						同遺跡調査団1997
改築	23,200	0.2	4,640							千代田区教委1998
改築	1,500	0.8	1,200							同遺跡調査団1998
火災	200	0.9	180	(武家屋敷→町屋へ)						地下鉄七号線1997
火災	260	0.4	104							同遺跡調査団1990
										中央区教委1988
改築	580	0.5	290							中央区教委1989
火災	5,700	0.5	2,850							港区遺跡調査事務局1992
火災	240	0.5	120							港区遺跡調査事務局1994
火災	11,350	0.9	10,215							都埋文1994
火災	2,100	0.3	630							同遺跡調査団1996
火災	500	0.3	150	(享保10年火災→火除地)						新宿区教委1996
火災	1,000	0.5	500	700 3.4 2,380						新宿区教委1998
火災	1,300	1.5	1,950							新宿区教委1996
造営	510	0.8	408							港区遺跡調査事務局1991
造営	2,800	0.8	2,240							同遺跡調査団1988,1989
改築	7,900	0.2	1,580							港区遺跡調査事務局1995
改築	6,100	0.5	3,050							都立学校1995
改築	2,000	0.2	400							同遺跡調査団1987
改築	500	0.3	150							港区遺跡調査事務局1993
改築	1,000	0.7	700							同遺跡調査会1996
改築	1,800	0.1	180							文京区教委1992
改築	7,000	0.3	2,100							文京区教委1993
改築	1,600	0.4	640							文京区教委1993
改築	950	0.2	190							豊島区教委1993,1994
										新宿区教委1994
										新宿区教委1997
火災	2,800	0.4	1,120							港区遺跡調査事務局1996
火災	1,600	0.3	480							都立学校1998
改築	2,500	0.4	1,000							港区教委1988
改築	1,000	0.1	100							豊島区教委1990
改築	230	1.0	230							新宿区教委1993
	628,830		402,771	700	2,380					
						235,460	74,250	200	800	
						906,450	500,681	10,500	17,355	
						1,140,320	1,123,319	13,750	29,775	

2)小計a~eのうち小計aはⅠ期(イタリック)、小計b~eはⅡ期にあたる。小計bは17世紀の明暦の大火に伴う改築、小計cは18世紀の改築、小計dは19世紀の改築(ゴチック)、小計eはb,c,dの合計(イタリック)。総計は小計aとeの合計(太字)。各小計では、同一時期内に改築の重複する遺跡(敷地)では調査面積、改築面積は差引、改築体積のみ累計。

III. 江戸城下町形成にともなう土地改変

(1) 天下普請の概要 (図1, 表1 参照)

江戸城の整備は天正18年(1590)から行われていたが、本格化するのは慶長8年(1603)に幕府が開かれてからである。寛永年間までの一連の整備は天下普請と総称され、全国の大名が工事を分担し、幕府の権力を誇示する事業でもあった。

このうち、大坂の陣までの慶長の天下普請では、江戸城の本丸・二の丸・三の丸や天守など、城郭部分の整備が主となっている。また神田の台地が大幅に切り崩され、豊島洲崎が造成されて、日本橋などの町屋の範囲も整備されている。

大坂の陣終結後の元和・寛永の天下普請では、まず元和6年(1620)に江戸城の本丸・北の丸・西の丸を囲む堀の石垣と城門の枡形が構築された。その後、寛永6年(1629)に内堀、寛永13年(1636)に外堀と、それぞれの堀の石垣造成・堀浚い・城門と枡形の建設が行われた。これらの普請によって、江戸城およびその城下町は一応の完成をみることとなる¹⁷⁾。

(2) 長府藩毛利家屋敷地における土地改変

①屋敷の成立

長府藩毛利家は、戦国大名の毛利元就、輝元の系譜にあたる。毛利家の所領は関ヶ原の戦い後、周防・長門両国であり、本家は輝元の実子、毛利秀就が継いだ。養嗣の毛利秀元、第二子の毛利就隆にもその領内から分知がなされた。長府藩毛利家(以下、毛利家と略)は、このうち毛利秀元を始祖とする支藩の一つであった¹⁸⁾。

毛利秀元は寛永17年(1640)に上屋敷を拝領する。これが麻布日ヶ窪の地であり、江戸時代を通じて上屋敷はここに位置した。『御府内場末往還其外沿革図書』によると¹⁹⁾、三代綱元が承応2年(1653)に家督継承した際、

弟の元知に領内の一部を分知し(清末藩)、あわせて上屋敷の北側を清末藩邸として一部貸し置いている。延宝年中(1673~80)の図では両藩の敷地が隣り合って描かれており、この二藩分が当初の屋敷地範囲であったと考えられる。毛利家はその後、正徳3年(1713)までの間に、周囲に隣接する麻布村の百姓地や、日ヶ窪の町屋を抱屋敷地として取り込み、屋敷範囲を若干広げている。屋敷地の大幅な変動は以後記録されていない。清末藩の敷地は、下つて文政5年(1822)に上地され、小倉新田藩小笠原家の屋敷として拝領地替えされている(図3)。

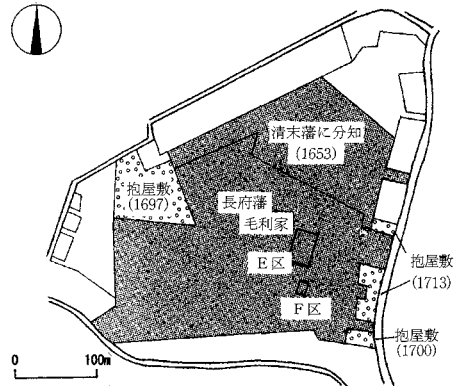


図3 毛利家の位置と屋敷範囲

地形図は『東京実測図』、毛利家屋敷範囲は『御府内場末往還其外沿革図書』による。

②発掘調査の概要

毛利家の屋敷地跡は近年までテレビ朝日社地として利用され、1999年より再開発にともなう発掘調査が計6地点で行われた。現在、E区とF区、二地点分の成果が報告されている(図4)。

F区は屋敷地範囲の南東寄りに位置し、井戸、石組をもつ地下式の倉庫、建物の礎石列などが検出された。遺構は礎石列が新しく、それ以外が古い(E区の第4期と第1期に該当)。当初の遺構は1mほど盛土された整地層上に構築され(第1面)、新しい礎石列の場合も、全体をならした上に構築される。第1面は地山の粘土層を不整合に厚く覆い、粘土層の面から遺構は検出されなかった。

E区はF区の北側に位置し、掘立柱建物6棟のほか、塀や井戸、建物の礎石列、敷地を区画する溝などが検出された。E区の遺構も

すべて整地層上に構築されている。遺構は建て替えごとに調査区全体が新たに20cm前後盛土され、整地し直されており、その整地層と遺構の新旧関係から4時期に分けられた(第1~4期。生活面が第1~4面に各々対応)。なお第1期の整地だけは厚さ3.2~3.5mに及び、粘土層ないし黒ボクの黒色土層を覆う。

各時期の年代は、整地層に認められる焼土などの火災の痕跡や(第2面と第3面で確認)、出土遺物の年代、屋敷変遷の記録から求めたが、文献史料の調査次第により、今後の報告で第3期以降の年代はより詳細に位置づけられると思われる。第1期は寛永17年の拝領から明暦3年(1657)の大火までで、区画溝がこれにあたる。第2期は大火後の建て直しに始まるが、掘立柱建物、塀とF区の井戸、地下室は第1期から第2期まで継続して存在したとみられる。第2期の終わりは、18世紀中葉と考えられる火災の痕跡で区別され(年代未特定)、18世紀後葉には下らない。第3期は18世紀中葉から19世紀前葉までであるが、調査されたE・F区ではこの時期の遺構は掘立柱建物と井戸が1基ずつしか確認されておらず、屋敷地の状況は現時点では不詳である。第4期は遺物から19世紀前半の構築と考えられ、礎石列を基礎とする建物がE・F区にかけて広がっていたものと予想される。第4期の終わりについて明確な資料はないが、遺物に明治期以降のものはふくまれず、幕末期とみられる。

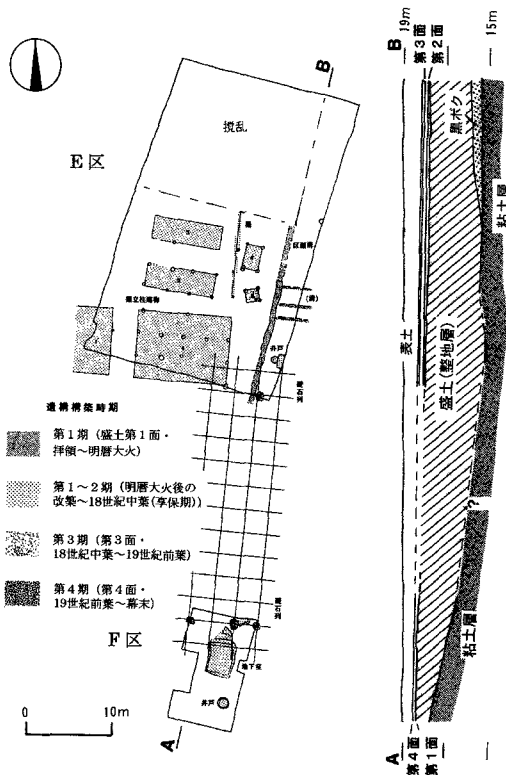


図4 毛利家上屋敷の遺構と盛土
港区遺跡調査事務局(2002)に基づく。
E・Fは調査区。

③毛利家屋敷の土地改変

発掘調査されたF区、E区では共に複数回にわたる整地層が検出された。なかでも、第1期の遺構の基盤となっている整地層(第1面)は、遺構・遺物との関係から、寛永17年の屋敷拝領にともなう造成跡と考えられ、その規模は後の時期と比較しても大きい。整地は調査区の全体にわたっており、上屋敷の建設にあたって、屋敷範囲内で広く土地改変が

行われたものと予想される。

そこで寛永17年に行われた屋敷地の整地について、発掘調査記録と地形図から復原を行った。毛利家周辺の地形は、『東京実測図』を基に判読した²⁰⁾。一帯は標高30m前後の下末吉面に相当する台地が広がり、樹枝状の谷によって開析されている。台地が谷に面する部分では、台地が一段下がって段丘のような平坦化地を形成している場合が多い。ただし平坦化地の高さはまちまちで、毛利家の敷地内のそれは標高20~22mで、下末吉面から約10m低い。また毛利家では、小規模な谷が敷地内にふくまれ、池が敷地中央に認められる。この池は谷の源頭部を利用して造られたものと考えられる。F区の位置する平坦化地は南で高さ8mの急崖をもって谷に接する。北は垣根でE区の位置する平坦面と仕切られるが、明確な高低差を有するかは定かでない²¹⁾。E区側の平坦面と低地までの高低差は1m程である。地図上では、E区・F区の位置する平坦化地は低地でないことは間違いないが、下末吉面より新しい台地面・段丘面なのか、完全な人工地形であるかは必ずしも明らかではない(図3, 5)。

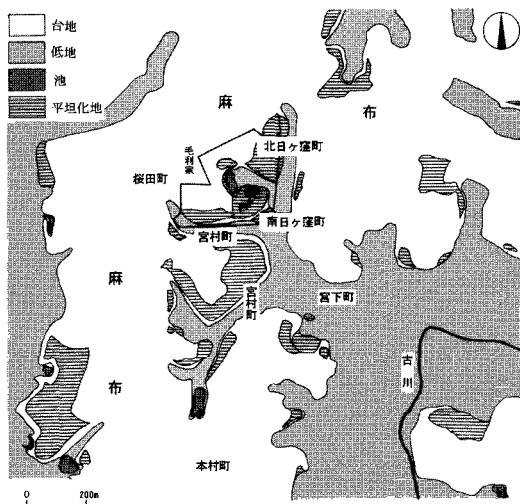


図5 麻布周辺の地形
『東京実測図』の判読による。

発掘調査ではF区で、屋敷拝領当初の第1面が、不整合に粘土層を覆うことが明らかにされた。この粘土層は白色の粘土層で、台地(下末吉面)の表層に堆積する立川・武蔵野の褐色ロームは確認されなかった。その代わり整地層の構成物中には、多量の褐色ロームのブロックや、東京パミスと呼ばれる火山灰が塊状に不均一にふくまれる。東京パミスは、武蔵野ロームの下部に挟まれる火山灰である。このことはF区のロームが下末吉粘土層の層準近辺まで大きく削平され、上層の堆積物が整地の盛土として再利用されたことを示唆しており、F区の位置する平坦化地は、下末吉面を階段状に切り崩して造成し、その排土を用いて整地を施したものと考えられる。

対するE区では、第1面が粘土層や黒色土層を覆うのが確認された。黒色土層は黒ボク土よりなる自然堆積層であり、E区の本来の地形面を示しているとみられる。したがってE地点の位置する平坦化地は、本来段丘面であり、F地点の下末吉面とは段丘崖で境されていた可能性が高い²²⁾。そして、その段丘面を大幅に盛土で覆うことで、F区とほぼ同じ高さに整地されたものと考えられる。

以上のことから、毛利家屋敷地に広がる第1面は、F区の側で台地を切土し、E区の側で段丘に盛土して屋敷地の東側一帯を整地するという土地改変によって形成されたものと判断される²³⁾。

なお屋敷地内には、E区・F区と谷をはさんだ北側にも、同様な規模・標高を有する平坦化地がある。これは後に清末藩邸となった部分であるが、同じ寛永17年の土地改変で切土された跡と考えられる。また低地も盛土によって埋め立て、池を残して造成したと推定し、屋敷地全体における土地改変の状況を復原した(図6)²⁴⁾。さらに平面上での復原に加え、発掘調査で得られた実測値を適用し、盛土・切土による土量の収支を算出した(表3)。

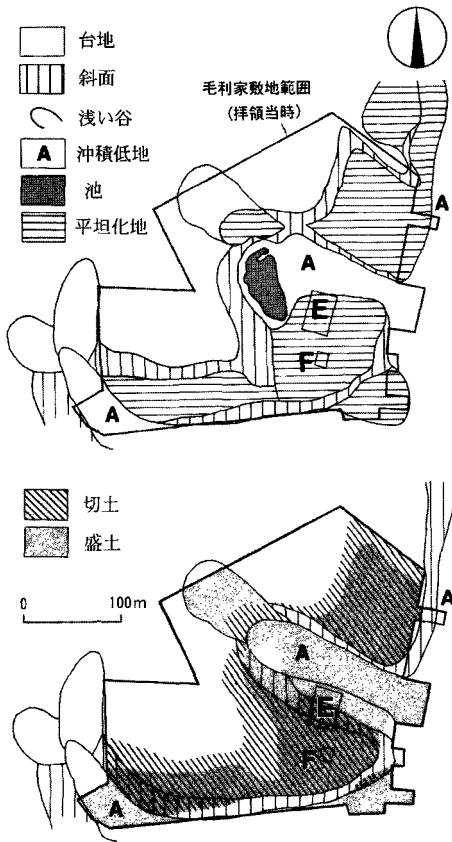


図6 毛利家一帯の地形と推定される原地形および改変範囲
港区遺跡調査事務局 (2002) 原図を修正・改図。

この結果を見ると、特に体積について、切土量が約12万 m^3 多く見込まれる。推計の幅や整地時の土の圧密を差し引いたとしても、この数値の幅はかなり大きく、土地改変の過程で、切土による大量の残土が発生していた可能性がある。それでは、この残土はどこに行ったのであろうか。

(3) 毛利家の事例と江戸城・城下町の整備

毛利家の屋敷が所在したのは麻布と総称された麻布町の一画であるが、寛永17年に屋敷地を拝領した頃、周辺にはすでにいくつもの寺社や町屋が存在していた。毛利家の西に接する桜田町は慶長7年(1602)頃に城内から上地されて現在地に替地された。北・南日ヶ窪町の起立は定かでないが、毛利家の南に広がる宮村町の町名は麻布総鎮守の氷川神社に由来し、早くから門前町となっていたことがうかがえる²⁵⁾。ただ麻布全体の町場化は寛文年間(1661~73)までかかっており、毛利家の屋敷造成よりは20年程度遅れる。

麻布の寺社は『御府内寺社備考』によると、法華宗の妙祝寺が寛永5年(1628)、清徳寺が寛永6年(1629)、臨済宗の大法寺が寛永10年(1633)に起立し、曹洞宗の龍興寺は寛永18年(1641)に現在地に替地されている²⁶⁾。町屋に

表3 毛利家屋敷地と周辺の土地改変

	改変内容	改変規模 (切土)			改変規模 (盛土)		
		面積	高さ	体積	面積	高さ	体積
毛利家	F区周辺：台地の削平 (切土) および整地 (盛土)	9,600	10.0	96,000	4,600	2.0	9,200
	E区周辺：整地				4,800	3.0	14,400
	池周辺の低地：整地				8,800	3.0	26,400
	池の北側の平坦化地：削平と整地	7,200	8.0	57,600	7,000	1.5	10,500
	宮村町側の平坦化地：削平と整地	6,000	8.0	48,000	5,600	1.5	8,400
	宮村町側の低地：整地				1,600	3.0	4,800
小計)		22,800		201,600	32,400		73,700
周辺	北日ヶ窪・南日ヶ窪町の台地削平	3,400	5.0	17,000			
	北・南日ヶ窪町の整地 (谷・低地の埋立)				47,300	3.0	141,900
小計)		3,400		17,000	47,300		141,900
総計)		26,200		218,600	79,700		215,600

港区遺跡調査事務局 (2002) を修正し再集計。面積 100 m^2 未満は四捨五入。高さは発掘調査と地形図からの推定値

ついて検討の余地が残るが、寺社については毛利家の拝領と相前後して建設されており、屋敷地周辺の土地が部分的に、毛利家屋敷地と同時進行で開発されていた可能性も否定しきれないと考えられる。

外堀普請前後の城下町で、武家屋敷・寺社地などの開発が同時に、なおかつ相互補完的に行われていた事例は他所でも認められている。寛永13年の外堀普請では、現在の市谷～赤坂間の堀が谷筋を利用しながら新たに開削され、堀として整備された。外堀の開削区間は、残された絵図面によると面積にして約10万 m^2 、土量は実に約67万 m^3 となり、大量の土が残土として排出された²⁷⁾。この切土は、そのまま盛土として転用され、堀の成形や門・橋の構築に利用されたとみられ、実際、外堀の牛込門などの発掘調査で確かめられている²⁸⁾。しかしそれらの造成分では、残土の量に遠く及ばないことも明らかである。

ここで寛永13年頃の城下町、特に周辺の開発に注目すると、開削された外堀に接する一帯では、武家屋敷や寺社、町屋の移転ないし新たな起立が、寛永13年前後に多く認められる。寺社の例では、牛込門から赤坂門間の外堀沿い、麴町清水谷辺りに所在した寺社が、寛永11・12年に牛込七軒町から四谷南寺町・赤坂台町にかけての一帯へ移転している。町屋では外堀の門の建設地点にあたる市谷船河原町、麴町11～13丁目、元赤坂町がそれぞれ移転し、ほかにも市谷田町、四谷塩町・伝馬町、赤坂田町・伝馬町が寛永13年ないし15年に新たに起立されている²⁹⁾。さらに寺院移転後の清水谷では、上山藩土岐家、横須賀藩本多家と、菅沼家、松平家（共に旗本）が正保年間（1644～47）までに屋敷を拝領している。これらの屋敷地も一部（土岐家・本田家敷地内）が発掘調査されており、平均5m高の盛土で谷が埋め立てられ、整地されたことが確かめられている。この盛土も外堀開削による残土と見られる³⁰⁾。

発掘調査の現状では、外堀の67万 m^3 からの残土すべての配分先を特定するのは困難であるが、史料とあわせた成果からみて、外堀普請時の残土が外堀周縁の城下町の整地に転用されたことは確実とみられる。外堀普請にともなう寺社等の主な移転先は、外堀の約1km外側までの範囲に収まっており、外堀から1km以内が寛永13年前後の城下町の新規開発区域と考えられる³¹⁾。

毛利家は外堀の外縁約1.5kmに位置し、距離的にやや離れている。しかし毛利家の建設では敷地内で大幅な造成が行われ、屋敷周辺では前後して寺社が起立している。外堀の建設とあわせて、郭外へと城下町の拡大整備が図られたと考え、市谷・赤坂や麻布における事例は、そのような幕府の城下町整備計画とも言うべき例の一つとして位置づけられよう。

このような観点から、毛利家の屋敷地周辺について、同時並行して寺社や町屋、あるいは城下町の街路の整備が図られたと考え、図面上に復原を試みた(図7)。範囲としては毛利家の門が面し、屋敷周辺に比較的まとまって分布する北日ヶ窪・南日ヶ窪町を想定した。町屋は多くが谷の低地部分に位置し、毛利家のE区のように盛土されたと思われる。毛利家と周辺街区全体で改めて盛土・切土の土量を算出すると、盛土215,600 m^3 と切土218,600 m^3 となり、両者の推定値はかなり近似して、ほぼ相殺される(表2)。この結果はあくまでも数値的近似であり、日ヶ窪町が毛利家と同時に起立したことを確実に証明するものではない。また外堀の残土で街を造成するのと、一大名屋敷の残土で街を造成するのではその意味も自ずと異なろう。しかし外堀一帯における動向からみて、毛利家の屋敷拝領が、幕府による外堀普請にともなう一帯の開発計画の一部として位置づけられていた可能性は高いと考えられる。

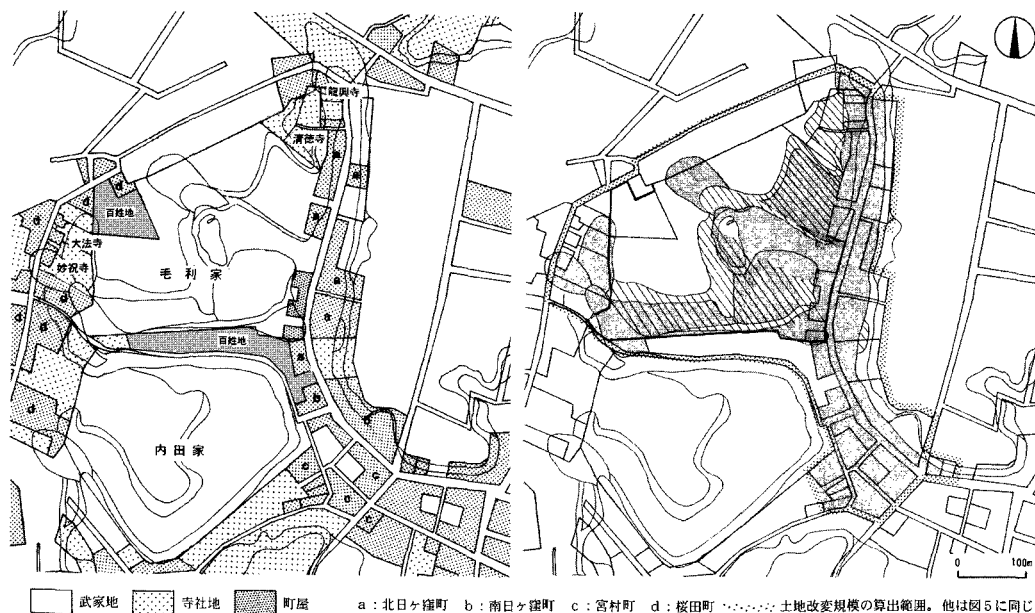


図7 麻布・毛利家周辺の街区の配置と土地改変状況

街区の配置は『御府内場末往還其外沿革図書』『御府内寺社備考』の記載に従い、『江戸復元図』東京都教育庁社会教育部文化課（1989）を参考に復原。地形は『東京実測図』に基づく。

IV. まとめ

江戸では、寛永年間までのⅠ期に大規模な土砂の移動をとまらう土地開発が実施され、城郭と城下町の整備がなされた。これは大規模土地改変をさほどともなわずに城下町の範囲が拡大するⅡ期と対照的である。

本研究では、そのⅠ期の城下町整備の事例として、毛利家の屋敷造成を取り上げた。毛利家では、屋敷範囲内の台地が大幅に切り崩され、敷地を全体的に整地した上で屋敷が建てられていた。また造成時に発生した多量の残土は、その大半を屋敷周辺の街区造成に転用することで処分していた可能性が高い。

前章までに見てきたように、毛利家をはじめ、主な大名の屋敷地拝領は慶長～寛永年間に集中しており、城下町各所での土地利用が幕府の何らかの意図の下に決められていたことは間違いない。これは外堀普請の大規模な土地改変にとまらぬ、大名屋敷等が外堀とい

う城郭設備と一体となって造成されていることから明らかである。

すなわちⅠ期の城下町整備にあつては、幕府による一連の開発計画が存在し、毛利家の屋敷における土地改変もその一端として実施されていたことが理解されよう。

本研究では、Ⅰ期の江戸城下町整備の一端を明らかにしたが、Ⅰ期の更なる詳細な復原に加え、Ⅱ期の城下町の拡大過程との比較等、課題はなお多い。明暦の大火で被災した屋敷等の再建時の土地改変規模は、Ⅰ期の場合よりはるかに小さい。またⅡ期の遺跡の分布範囲や土地改変規模はⅠ期と異なる点も多い。これらは城下町がⅠ期で一通り完成し、Ⅱ期では大規模な土地改変をⅠ期ほど必要としなかった。言い換えれば開発の質的転換があつたためとも考えられる。今回は主に考古学資料に準拠したが、文献史料や地図資料等、諸資料を活用した研究を進めることで、江戸城下町の歴史地理をより精密に復原して

いく必要があるものと考えている。

(千葉大学・院)

〔付記〕

本研究の端緒をつけて頂いた古谷尊彦教授(千葉大学)、江戸の遺跡の発掘調査でお世話になった各教育委員会や調査会の諸氏、ことに古泉弘、小俣悟、丸山清志、今野春樹、粕谷崇、大八木謙二、高山優の各氏(順不同)に御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 城下とは城郭を中心として成立した、武士・町人らの居住する町全体を指し、城下町とは領主の住まう城と城下の両方をふくめた言い方である(小野均『近世城下町の研究』, 至文堂, 1928, 26~27頁。矢守一彦『都市プランの研究』, 大明堂, 1970, 247~259頁。)。江戸は幕府の中心地であり、人口百万人に達するなど、その諸特徴から巨大城下町などとも呼ばれるが、本質的に江戸も一城下町であることに変わりはない(例えば吉田伸之『巨大城下町-江戸』『岩波講座日本通史15』, 岩波書店, 1995, 149~188頁)。呼び方については本研究でも先の定義に従う。
- 2) 後藤宏樹「遺跡にみる城下町江戸の造成」千代田区教育委員会編『特別展・発掘が語る千代田の歴史』, 千代田区教育委員会, 1998, 28~35頁。
- 3) 北原糸子『江戸城外堀物語』, 筑摩書房, 1999。
- 4) 港区遺跡調査事務局編『長門府中藩毛利家屋敷跡遺跡発掘調査報告書1』, 港区教育委員会, 2002。
- 5) ①正井泰夫「百万都市江戸の地域構造と活力」, 都市問題研究32-1, 1980, 64~77頁。②玉井哲夫『江戸-失われた都市空間を読む』, 平凡社, 1986。③正井泰夫『城下町東京』, 原書房, 1987。④矢守一彦『城下町のかたち』, 筑摩書房, 1988。⑤鈴木理生『江戸の都市計画』, 三省堂, 1988。⑥鈴木理生『幻の江戸百年』, 筑摩書房, 1991。
- 6) 前掲3), および後藤宏樹「発掘された江戸城跡・江戸城外堀跡」千代田区教育委員会編『江戸城の考古学』, 千代田区教育委員会, 2001, 1~8頁。
- 7) ①内藤昌『江戸と江戸城』, 鹿島出版会, 1965。②鈴木理生『江戸と城下町』, 新人物往来社, 1976。
- 8) 時期区分では、考古学的にも明確な明暦の大火を指標に用いた。そのためI期は天下普請完了までとあるが、年代幅としては明暦2年までをふくめてある。
- 9) I期末には外堀普請により、牛込や四谷など、外堀の外縁までが城下町となった。なお図1では、古地図として明らかな『武州豊嶋郡江戸庄図』(『寛永江戸図』)により、寛永9年(1632)頃の範囲を示した(近松鴻二『武州豊嶋郡江戸庄図』の基礎的研究, 東京都江戸東京博物館研究報告2, 199~223頁)。
- 10) 土地区画や個々の屋敷造成に関わる古地図、文献史料も多いが、長府藩毛利家と同じ基準で確実に対比可能な例として、遺跡の発掘調査事例を対象とした。なお土地利用は武家屋敷・寺社・町屋・その他の4種類に区分した。区分は正井泰夫「2万分の1江戸の都市的土地利用図」, 地図13-1, 1975, 9~16頁, 及び高橋秀和「GISを使った江戸の土地利用変化と経年変化の抽出」, 国土館大学地理学報告9, 2000, 14~23頁, に準じる。武家屋敷は大名屋敷, 一般の武家屋敷の武家地全体, 寺社は神社, 仏閣の双方を指す。また土地変更の要因として, 新規の造成・改築・火災の三種類を挙げた。火災は焼土や炭化物の層を残し, 遺跡でもその痕跡がよく確認されるため取り上げた。特に火災が原因として造成・改築の行われたことが明らかな場合を表す。改築は文献史料から拝領地替や代替わりによると考えられるが, 実際には明暦の大火など, 拝領地替が災害後の再建の一環として行われる場合も認められ, 改築理由として改築と火災を厳密に区別することは難しい。本研究では火災の痕跡の明確でないものはすべて改築とした。また整地等の種類は盛土(土盛り・版築・埋め立て)と, 切土(削平全般)

の2つに大きく分けた。

- 11) 千代田区教育委員会編『和田倉遺跡』, 千代田区教育委員会, 1995。
- 12) 水江漣子『江戸市中形成史の研究』, 弘文堂, 1977, 115~138頁。
- 13) 黒木喬「明暦の大火」前後における屋敷移動, 地方史研究155, 1978, 1~12頁。
- 14) 前掲13) 及び, 加藤貴・松尾美恵子・泉正人「明暦の大火と再建」千代田区政五〇年史編纂委員会編『千代田区史』, 千代田区, 1999, 314~341頁。
- 15) 前掲 4)。
- 16) II期は明暦の大火以外, 各報告書で改変の年代が特定されていない場合が多く, 遺物の年代観から18世紀, 19世紀に便宜的に二分した。
- 17) 堀新・松尾美恵子・泉正人・波多野純・加藤貴「近世を迎える千代田区域」千代田区政五〇年史編纂委員会編『千代田区史』, 千代田区, 1999, 247~313頁。
- 18) 以下, III-(2)節の事実記載は, 特記しない限り前掲4) 報告書の内容による。
- 19) 毛利甲斐守・小笠原備後守屋敷周辺部として以下に所収。幕府普請奉行編『御府内場末往還其外沿革図書 第17部(中)』, 安政5年(1858), 東京都立公文書館蔵。
- 20) 参謀本部陸軍部測量局編『五千分一東京図測量原図』, 日本地図センター複製, 1984。
- 21) 垣根部分は発掘調査区外にあたり, 実際的高低差は未確認である。
- 22) E区整地層下の地層の調査は必ずしも十分でなく, 段丘面の地形の形成年代は明らかでない。
- 23) 一屋敷地ないし隣接する複数の敷地内で台地を切土し, 低地の側に盛土するという土地改変の事例は, 他にも本文中の紀尾井町遺跡や筑土八幡町遺跡(新宿区教育委員会編『筑土八幡町遺跡』, 新宿区教育委員会, 1996)などで認められる。
- 24) 本文中でも述べたように, F区の発掘では切土で生じた凹凸面の上に改めて盛土して, E区まで続く水平な平坦化地を造成している。本研究では屋敷範囲内の他の平坦化地も同様の方法によるものとみなし, 復原を行った。図6で台地部分の切土・盛土の範囲が一部重複するのはこのことによる。
- 25) ①角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典13 東京都』, 角川書店, 1978, 61, 62, 247, 685頁。②岩垣顕『東京35区地名事典 赤坂区・麻布区編』, 岩垣顕, 1999, 10, 32, 40, 41, 91, 92頁。
- 26) 昌平坂学問所編「御府内備考・続」, 文政12年(1829), 国立国会図書館蔵。引用は下記による。朝倉治彦解説『御府内寺社備考』, 第4巻261~262頁, 第5巻47~48頁, 第6巻307~308頁, 名著出版, 1987。
- 27) 数値は, 厚秀雄「堀方普請の実態について」地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会編『江戸城外堀跡牛込御門外橋詰』, 地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会, 1994, 123~137頁に所載の絵図面の数値をメートル法に換算。なお尺貫法の長さは発掘調査の実例から(藤本強『埋もれた江戸』, 平凡社, 1990, 246~265頁)江戸間(6尺=1間)を用いた。
- 28) ①地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会編『江戸城外堀跡牛込御門外橋詰』, 地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会, 1994。②地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会編『赤坂御門・喰違土橋』, 地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会, 1995。③地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会編『市谷御門外橋詰・御堀端』, 地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会, 1997。
- 29) 榎木真「発掘調査を通してみた文献史料」, 地方史研究47-6, 1997, 26~40頁。
- 30) 紀尾井町遺跡調査会編『紀尾井町遺跡発掘調査報告書』, 千代田区教育委員会, 1988。
- 31) 榎木真「寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化」地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会編『市谷御門外橋詰・御堀端』, 地下鉄七号線溜池・駒込間遺跡調査会, 1997, 461~486頁。